

令和二年度 徳島県高等学校教育研究大会（国語学会）発表資料
ICTを活用した国語科授業実践

徳島県立つるぎ高等学校 教諭 茅野 由紀子

一、本校の概要

つるぎ高校は、貞光工業高校と美馬商業高校とが平成二十六年四月に統合再編をし、今年度開校七年目を迎える歴史の新しい学校です。教育目標を「地域に根ざした工業教育・商業教育を推進し、たくましい実践力と創造性に富み、地域社会の発展に貢献できる高い志と専門的な技術を有するスペシャリストを育てる」と掲げ、工業科（電気科・機械科・建設科）と商業科（商業科・地域ビジネス科）の五つの科を設置しています。今年度は、一クラス二十五名程度で、各学年七クラス合計五〇〇名の生徒が在籍しています。工業科と商業科併設のメリットを活かし、両科にわたる知識と技術を活用して、協同しながら特色ある学校づくりを進めています。また、資格取得や検定合格への取り組みも成果を上げており、専門性を生かした就職進学を実現し、令和元年度の進路実績は、就職八十八%、進学十二%となっています。

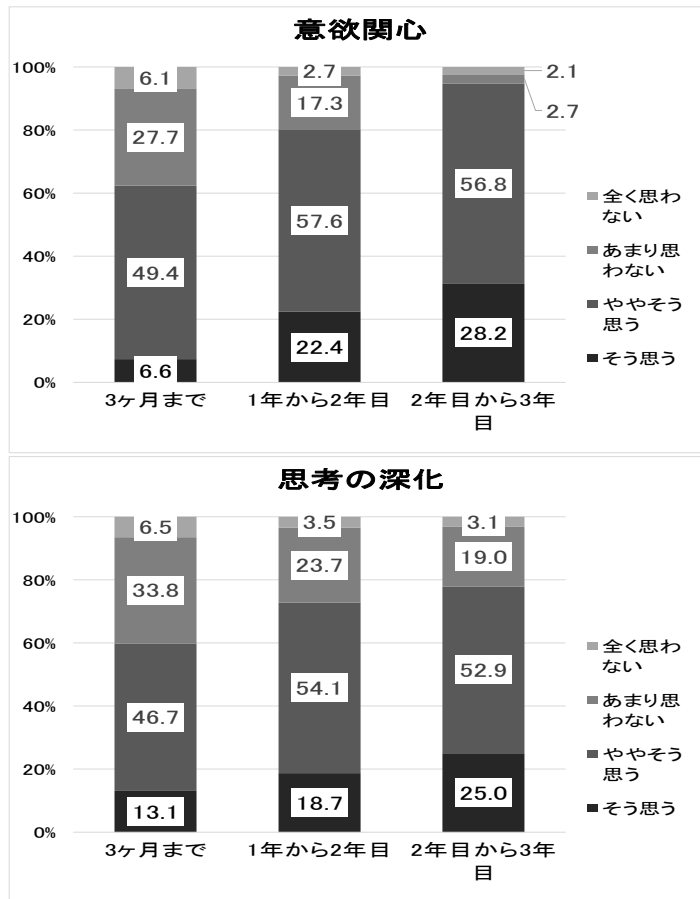
また、部活動への取り組みも熱心であり、体育部では「男子ソフトテニス部」「陸上競技部」「ラグビー部」「レスリング部」「山岳部」、文化部では「機械工作部」「経理部」「ICTビジネス研究部」が全国大会出場を果たしています。

二、ICT環境の整備と授業の模索

本校は、平成二十九年より「進化する教室イノベーション事業」の実践校として、各教室に大型電子黒板と無線LANが配置され、教員には学習系タブレットが配布されました。さらに、平成三十年度には「次世代学校ICT環境」が整備され、生徒用タブレットが二十台、クラウドプラットフォーム「まなびポケット」とリアルタイム授業支援アプリ「MetamojiClassRoom」が導入されました。本年度には生徒用タブレットが追加導入され、授業で一人一台ずつ使用できるようになりました。

本校国語科では、ICTを効果的に利用し、授業を活性化する方法を模索しました。まず、デジタル教科書やタブレットのカメラ機能、インターネット検索などの利用を積極的に取り入れしました。大型電子黒板にデジタル教科書を映写することで視覚的に作業を指示でき、生徒のノートや作文をカメラで撮影し、大型電子黒板に映写することで生徒の興味関心をひくと同時に効率的に意見を共有できました。

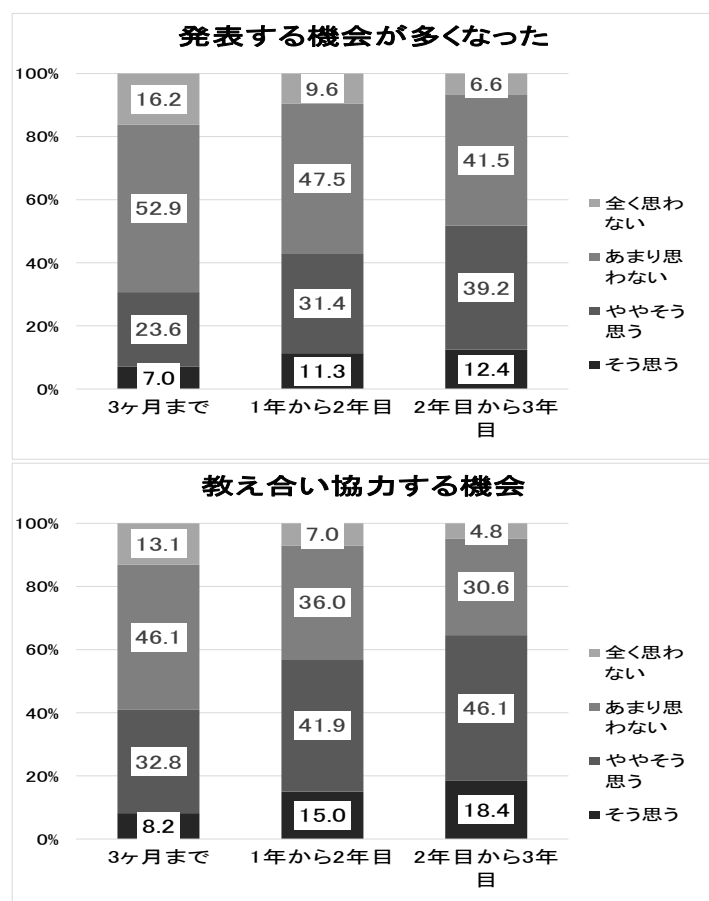
ICT機器を授業に導入した後、生徒にアンケートをとると、電子黒板などICT機器を使うことで「意欲関心を高めることができたか?」「深く考えることができたか?」という項目では、



「そう思う」「ややそう思う」という回答が、合わせて約八十%を占めました。一方、「教え合い協力する機会が増えたか?」「発表する機会が増えたか?」では約六十%となりました。この結果を踏まえ、国語科の授業では、自分の意見や考えを表現する活動や、他者とのコミュニケーションに重点をおく活動を設けることとしました。これらの活動は新学習指導要領の教科目標「2 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす」ことにもつながると考えました。

リアルタイム学習支援アプリ「MetamojiClassRoom」は、教師が用意した教材文やワークシートなどを生徒のタブレットに配布することが出来ます。そして、生徒は配布された教材にタッチペンやキーボードを使用して文字や絵を描き込むことが出来ます。また、タブレットで撮影した写真や録音した音声をワークシートに貼り付けることも出来ます。さらに、教師は、生徒が書き込む内

三、「MetamojiClassRoom」を使った授業実践



容をリアルタイムでモニタリングができ、生徒からの個々の質問に教材を介して答えたり、アドバイスを書き入れたりできます。また、複数の生徒の画面を大型電子黒板に映写することで、クラス全員で生徒一人ひとりの学習内容を共有できます。

「MetamojiClassRoom」のメリットは、生徒と教師、あるいは生徒同士が同じコンテンツ上で協働的に学べることです。言い換えると、生徒は自分の意見を教材に書き入れると、ほぼリアルタイムで相手から反応を得ることができ、また、他の人の意見や考えを知ることができるということです。この即時的で双方向的なやりとりは、生徒の思考力・判断力・表現力に働きかけ、主体的で創造的な学びへと導くものであると考えました。

1 「古文の音読」一年 【国語総合】

(1) 指導上のねらい

音読して古文の読みに慣れさせる。

(2) 指導の実際 (二時間)

実施クラスは、商業科 (二十五名)、機械科一年生二クラス (合計四十九名) です。

教材は新編国語総合改訂版 (大修館書店) 「枕草子 第一段」です。入学して最初の古典教材であることから、生徒の古典に対する苦手意識を払拭し、楽しんで取り組める活動になるよう配慮しました。

「枕草子」を音読することによって、古文の読み・リズムに慣れさせるために「MetamojiClassRoom」を使用しました。

「MetamojiClassRoom」の音声録音機能を利用して、教師主導ではなく、生徒自身の活動として行えるよう試みました。

○一時間目

- 1 「枕草子」について中学校で学んだことを発表する。
- 2 教師の範読を聞き、各自音読練習をする。
- 3 文章の構成を把握し、基本的な古語の意味を確認し、内容を把握する。
- 4 用言の種類や用法、活用について基本的な内容を学習する。

○二時間目

- 1 「MetamojiClassRoom」音声録音機能を利用し、生徒の音読を録音する。
- 2 再生し、自分の音読を聞き、改善点などがあれば修正する。
- 3 再度録音し、自分の音声を聞き、自己評価する。
- 4 録音されたものをクラスで発表・共有し、教師が評価する。

(3) 成果と課題

古典に対する苦手意識を持つ生徒が多く、該当クラスで入学当初に行った簡単なアンケートではおよそ八十五パーセントの生徒が「古典は苦手である」と回答しました。消極的になることを避け、できるだけ楽しみながら、生徒が主体的に活動できるように「MetamojiClassRoom」を利用しました。また、入学して間もないということもあり、お互いに音読を聞き合うという活動はハードルが高かったため、「自分で自分の音読を聞く」という活動にしました。自分の声を聞くという経験が少なかったようで、「客観的に自分の音読を評価できることが新鮮だ」という感想を聞くこ

とができました。また、自分自身で改善しながら何度も録音し直せることも主体的な活動につながったと感じます。録音された音声をクリックで共有した場面では、他の生徒の「良いところ」を見し、感想を言い合う活動を楽しめているように感じられました。録音されたものは、そのまま残り、繰り返し聞くことができるため、教師が授業後に落ち着いて評価できる点が「Metamoji Classroom」の良さだと感じています。

2 「リーダーズシアターを開こう」三年選択【国語表現】

(1) 指導上のねらい

- ① 音声表現の面白さを感じ取り、表現力を高めさせる。
- ② 朗読する際の工夫を互いに指摘し、話し合うことで作品理解を深めさせる。

「MetamojiClassRoom」を使い、グループ内で作品とワークシートを共有し、話し合いながら意見を書き込むことができるので、意見を集約しやすく、作品の解釈や朗読の工夫について話し合いがスムーズに行われることを想定しました。

(2) 指導の実際(三時間)

実施したクラスは、商業科・地域ビジネス科三年(計九名)です。用意した教材は「夕鶴」(木下順二)「ロミオとジュリエット」(シェークスピア)から抜粋したものです。(「国語表現」大修館書店)男子五名が「夕鶴」を、女子四名は二組に分かれて「ロミオとジュリエット」を朗読しました。

○一時間目・教師が教材を音読。登場人物の心情や背景などに

ついてそれぞれで考え、プリントに書き込む。

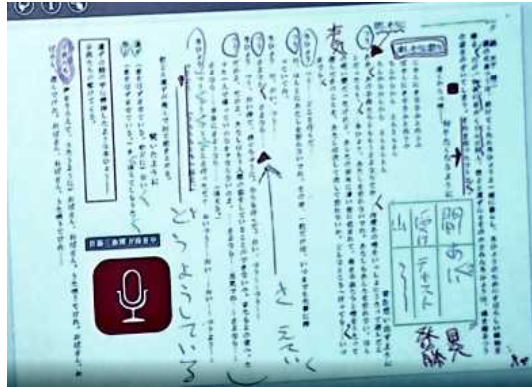
○二時間目・グループに分かれ、それぞれの考えを伝え合い、朗読の仕方を話し合う。「MetamojiClassRoom」の録音機能を使い、音声を確認しながら朗読の練習をする。

○三時間目・クラスで発表する。相互評価と自己評価を行う。

(3) 成果と課題

話し合いでは、意見の交換が活発に行われ、教材には生徒それぞれが考えを書き込んでいきました。そのワークシートを参考にグループで練習をしました。間合いや抑揚について録音を聞きながら、自分たちで修正していたのが印象的でした。たとえば、「夕鶴」の童歌の場面で、子供らしさを表現するために童歌の節回しや声の出し方を工夫し、何度も練習するなど、自分たちの表現を追求する姿勢に主体的で深い学びを見出すことができたのではないかと考えます。

課題は、評価の問題が挙げられます。今回の授業では、相互評価と自己評価を行いました。明確な評価基準を設けておらず、曖昧な評価にとどまってしまいました。

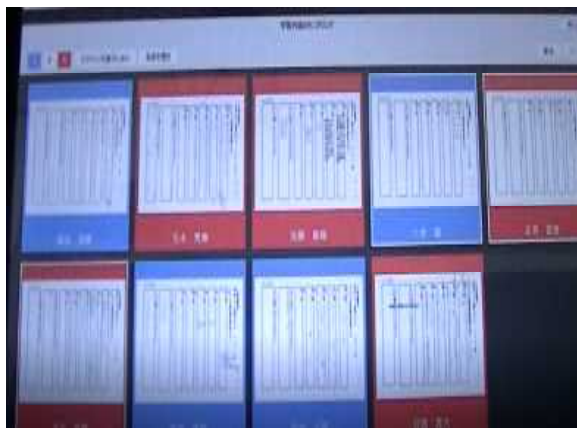


「Metamojiclassroom」の共有シート



朗読劇発表

各自がタブレットを持って発表している様子



モニタリング画面

教師のモニタリング画面に生徒のシートが集約されて映し出される。その画面を電子黒板に映写することも可能。

- 3 「開廷！模擬裁判」三年選択【国語表現】
- (1) 指導のねらい
模擬裁判の台本に従って、ロールプレイをすることで、複数の情報に基づいた論拠を探しながら、有罪か無罪か考えさせる。さらに、有罪・無罪に分かれて、論拠の妥当性を示しつつ討論する。
- (2) 指導の実際（2時間）
○一時間目・台本に従ってロールプレイする。証拠を吟味しながら、話し合い、有罪か無罪か自分の立場を決める。
○二時間目・有罪無罪の立場に分かれ、討論する。討論を通して、最終的な意見と論拠を明らかにし、判決を出す。

生徒は模擬裁判を通して、根拠と意見のつながりを意識して話

4 「俳句」三年【現代文A】

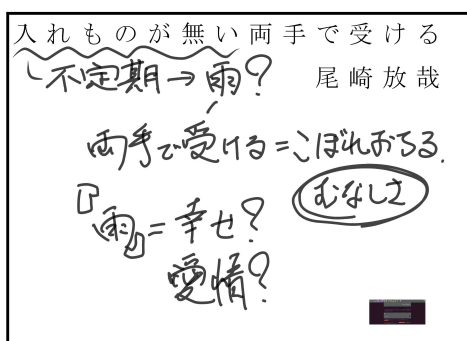
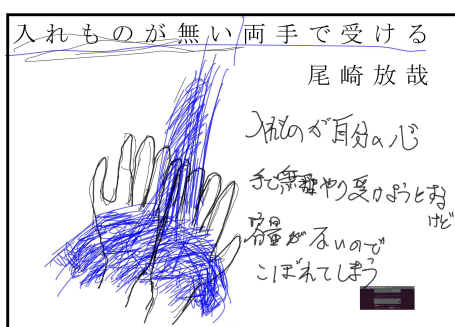
①俳句をよみ、想像力を豊かに働かせ、鑑賞した内容を言葉や絵で表現させる。

(2) 指導の実際 (四時間)

○一・二時間目・二人一組になり、「春雷」（『現代文A・B
東京書籍）の俳句をよみ、イメージしたものを書き、
「Metamoji Classroom」のワークシートに書く。クラス全員でワ
ークシートを共有しながら、順番に説明していく。

(3) 成果と課題

授業の前半で、生徒は、自分たちで自由に俳句を鑑賞するということに興味を持ったようでした。十七文字から情景や心情を発想するには各自の想像力を豊かに働かせ、また、浮かんイメージを言葉や絵に表現することに苦心しながらも意欲的に取り組んでいました。「MetamojiClassRoom」では、作成過程のワークシートも共有できるので、他の生徒に相談して、さらに考えを深める生徒もいました。発表場面では、他の生徒の鑑賞に真剣に聞き入っていました。また、自分のイメージを上手く伝えたいと何度も練習する生徒もありました。授業の後半で、教師の解説を聞き、自分のイメージとの違いを楽しみ、俳句の鑑賞に興味を持つ姿が見られました。



5 「MetamojiClassRoom」について～生徒の感想から～

- ・ペアで意見を出し合いながら答えを出したり、他のペアの意見も前のスクリーンで共有したりすることで、色々な考え方があ
ることを知ることができた。
- ・授業に楽しく取り組みめた。自分の考えをうまく表現したくて、
友達に意見を聞いたのが面白かった。
- ・リアルタイムでみんながどのようなことを書いているのかが分
かるので、見ていてとても面白くて分かりやすいと思った。
- ・話し合いが録音されて、後で誰が何を言ったのかがわかって便
利だと思った。
- ・一度書いた内容が保存され、続きから始められる点は効率的だ
と思う。
- ・一人一人がタブレットを使用することで、画面が見やすく、先
生の指導も分かりやすいところがメリットだと思う。
- ・生徒全員で画面を共有することで、ひとりひとりの考えをすぐ
に知ることができる点もメリットだと思った。

四、パブリッククラウドシステム「まなびポケット」の活用

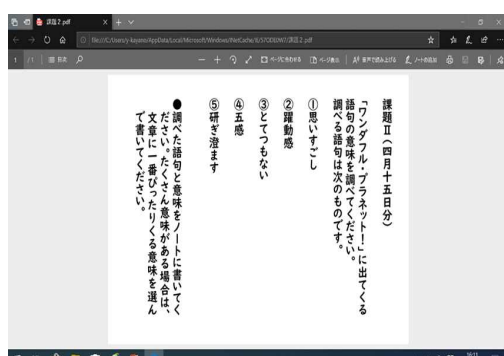
生徒のスマートフォンやタブレットに一斉に、あるいは個別に
情報を送受信できる電子掲示板が「まなびポケット」です。毎日
の家庭学習や隙間時間での学習を可能にし、予習復習を繰り返す
ことで、学習内容の定着を図ることができます。生徒が自宅や通
学時などにスマートフォンなどを使って短時間学習に利用するこ
とを想定しています。

教師は、生徒のコンピュータの利用状況が履歴として記録され

るログを確認することで、各生徒の学びの状況を管理することが
できます。また、教員間での情報の共有も可能です。「まなびポ
ケット」には「メッセージ機能」「クイズ機能」「アンケート機
能」とあり、それぞれの用途に合わせて情報を発信できます。

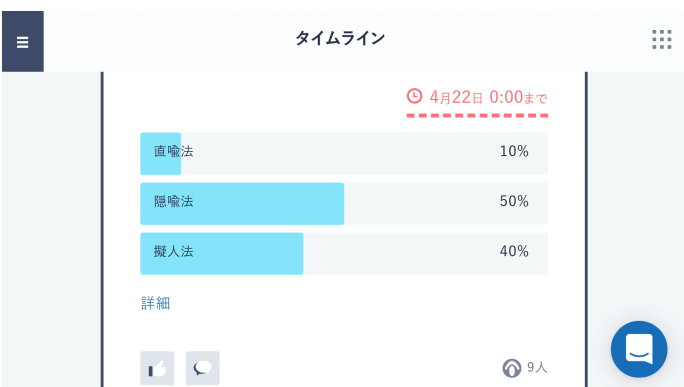
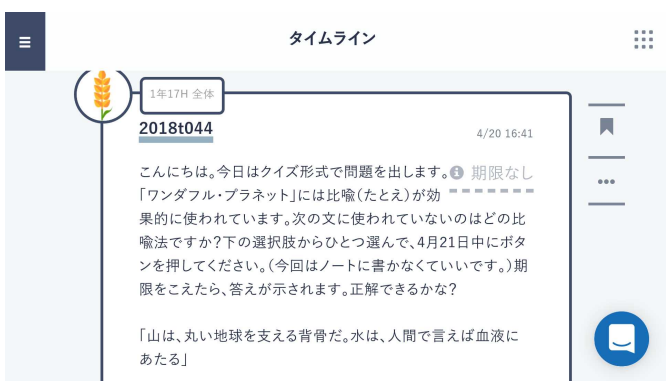
(1) メッセージ機能

生徒に課題学習の問題を送信することができます。事前に作成
したプリントなどをPDF文書で添付することもできます。
国語科では、今回のコロナウィルスによる長期休業中の課題を
送信しました。生徒は、スマートフォンなどに送られてくる課題
を提出して学習を続けました。



(2) クイズ機能（多肢選択式問題の出題と自動集計）

選択問題を用意し出題することで、自動集計を可能にし、課題の定着率を確認することができます。小テストとして、資格試験や単元学習から出題できます。



「まなびポケット」には、アンケート機能もあり、日々の体調管理や学習状況の把握などに活用しました。また、「Classi」（ベネッセ）の導入も進められており、本校では、多様な学びの場が用意されています。

五、考察

今回、国語科の授業で、効率的かつ効果的にICTを活用する方法を模索しました。生徒の反応はおおむね好評であり、主体的に授業に参加する姿を見ることができました。特に、自分の考えや意見をまとめ、発表するという活動に積極的に取り組めたと考えます。これは、社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばすことにつながったと考えます。ICT機器を用いることで、集団の中で発表することへの抵抗感を弱め、思考し想像する楽しさと表現を工夫する面白さに気づいたのではないかと考えます。

また、教員の側からしても、授業中に生徒の意見や考えを知るには限りがあり、時には、発表の得意な生徒の意見に偏りがちになってしまいます。また、意見や感想文を書かせても、即時に授業に活かすことは容易ではありません。このような問題を、ICT機器は解消してくれます。生徒の意見を電子黒板にそのまま映写することで、生徒は自分の考えと比較するなど発展的に考える材料を得られます。生徒は、自分の意見が授業に反映されることで、意見を出すことに価値を見出し、授業へ参加する動機付けとなるのではないかと考えます。

さらに、コロナウイルス感染症の影響で、「対話的で主体的な深い学び」を目指して行ってきた授業実践が、感染症予防の観点から実施が難しい状況となりました。特に、話し合いやグループ学習は、ソーシャルディスタンスの関係で授業に取り入れられませんでした。しかし、「Metamojiclassroom」や「まなびポケット」を利用することで、生徒たちは各自の席で意見を交換したり、協

同作業を行うことができます。また、必要に応じてZOOMを利用し、画面越しに表情を見ながら話し合うことも可能です。コロナウイルスとの共生を余儀なくされたこれからの教育に、ICT機器の活用は必要不可欠であるといえます。

このように普段の授業の中で、ICT機器を使いこなすことは喫緊の課題であり、ICT機器の機能や操作方法を理解することは重要です。しかし、ICT機器の特性やメリットデメリットを把握しておかなければ、授業で有効活用することは難しいと思われます。そのためには、学校内外での情報共有が必要だと考えます。ICT機器は授業を効率的に行う道具でしかなく、言語能力を直接的に向上させる手段ではありません。授業のねらいや言語活動に沿って、適切な場面でICT機器を使用することが重要であると今回の実践を通して実感しました。言語能力を向上させる手段は、教師の授業研究や授業展開の工夫であり、これまで培ってきたスキルであることに変わりはありません。大きく時代が変容するなかで、現代の教師には、変わらず研鑽を積み、新しい知識や技能を吸収することが求められています。